

祖聖と老病死

名 畑 應 順

昨冬『學報』の編輯者から病中の私に軽い隨筆風の原稿を書けとて、二三の題目まで設けて、丁寧な依頼状を寄せられた。併し私は山中の寂漠の裡に昏々悶々として只管病を養つてゐる現情で、まだ深く思考を練る能もなければ、廣く群籍を漁る力もない。平素純粹な學術雜誌として殆ど學徒の研究論文ばかり發表される『學報』に載せるものとしては、いくらか軽い隨筆をといはれても、氣分が重くて容易に筆が執れなかつた。それに示された題目は眞宗學に關するもので、私などが云々するのは聊か烏滸がましく思はれてならなかつた。但

その題目の中に一つ「病床に拜する宗祖のお言葉」といふのがあつて、これだけは今の私の爲に編輯者が特に選んで授けられたものであり、私としても何か申し述べたいものがあるやうな氣がしたので、こゝに掲げた標題の如く改めて、とにかく稿を起して見た。それでも書き進む途中には幾度か私のいふことをつまらなさが思はれ、愈々『學報』に不適當のやうに考へられて、屢々筆を投ずることもあつた。けれども編輯者が特に病人の私に題まで與へて書かせようとされた意志を尊

重すると共に、甚だ横着ではあるが、何事も身心罷弱な病夫のいふこととして寛容を請ふことにして漸く稿了した。固より何等の研究もなく、ざりとて要求された隨筆としては重苦しいものであり、論說としては蕪雜を極めてゐる。論語といはうか苦語と名づけようか。偏に自身の今日の生活を通して祖聖を憶ひ、祖語を拜するの餘に出でたことだけを斷つておきたい。

一

古來の高僧たちの出家の動機が多く無常感にあつた如く、祖聖親鸞の出家も幼少にして父母に死別されたことが因縁となつたと傳へられる。一説にいふ如くたとひ父君有範朝臣は早世されたのではなく、當時の戦亂に關係された結果、世上へは卒去といふ形にして、その實遁世されたのであつても、それがやがて祖聖に取つて人生の不如意、世間の無常を感知せしめる事由となつたことは

争はれまい。九歳の春の剃度に當つて詠まれたといふ歌は、固より傳説に過ぎないだらうが、念々無常の感懷を吟詠したものとて、舊來世俗に語り傳へられて來たといふことは一顧されてよからう。とにかく宗教的天才とも稱すべき俊敏な幼童の胸には、早くも何となく世のあはれさ、はかなさともいふべきものが仄かに感ぜられてゐたに違ひない。後年「源空三五のよはひにて、無常のことはりさとりつ」と歌はれた師の聖人源空よりも更に少くして出家されることゝなつたのである。

併しながら聖人が眞に人生の無常を痛感されたのは寧ろ叡山の修學時代でなかつたかと思はれる。人は誰しも壯歳や老年の時期よりも、青年時代に於いて人生に對する深い疑惑を懷き、世の寂しさを思うたり、死の恐怖に驅られたりするものである。それが況して聖人のやうな純眞な感情を持ち、眞摯な求道の念に燃えた人であつて見れば、尙更熾烈であつたことと察せられる。存覺上人が當時の聖人の胸中を推想して、「定水を凝すと雖も、識浪頻りに動き、心月を觀すと雖も、妄雲猶覆ふ。而る

に一息追かざれば、千載に長く往く」と歎ぜられたのは、如何にもその動亂と苦悶とを最も巧妙に又適切に現はされたものといへよう。こゝに聖人は山を下つて六角堂に參籠し、聖徳太子の示現に預つて、法然上人の門に入られたのであるが、『惠信尼文書』の記する所に據れば、この參籠は實に「後世を祈らせ給ひける」ものであり、法然聖人をば「後世のたすからんずる上人」として訪ねられたものであつて、當時の聖人は専ら無常迅速の世に處する身命の危さを感じて、一途に後世の得脱を願はれたのである。

斯くの如く出家の動因も隱遁の緣由も共に無常感にあつたにも拘はらず、後來の聖人の述作の上には餘り直接に無常を悲まれたのを見ない。その點では一種の哀調を帯んで切々として人に迫るやうな無常感を叙べた當時の餘他の念佛者とは自らその趣を異にしてをり、祖師親鸞の祖述を以つて任とした蓮如上人が毎に無常に立脚して大衆に教化を布かれたのとも必ずしも一致しない。而してそこに何となく聖人の特性が窺はれるやうである。謂

ふに聖人にあつてはやるせない無常の悲哀とか、突きつめた死の恐怖とかいふやうなものは、これを省察すれば單なる苦痛とは異つて、所謂生死の苦惱であり、人生そのものを根本から揺り動かす懊惱であつて、それは正しく曠劫以來の宿業に因り、底の知れない罪障に根ざしてゐると感ぜられた。従つて無常感は轉じて苦惱感となり、罪業感となつて、聖人の魂を鞭うち、内面的にこれが解決を促されてゐられたやうである。

所作已に辨じ、梵行已に立つた釋尊は、「後有を受けず」との解脱に達せられ、求道を以つて終始した孔子は「朝に道を聞かば、夕に死するも可なり」と述懐された。戰々兢兢として深淵に臨むが如く、薄氷を履むが如くにして、父母から受けた身體を完全に保持した至孝の人會子には、臨終に「而今而後吾免るゝことを知るかな」の安らかさがあつた。徳を修め善を積んだ聖賢に取つては、死はまことに解放であり休息であり、安慰である。一生造悪の凡愚はかゝる境地を夢想することも出来ない。

「大命將に終らんとして悔懼交々至る。豫め善を修めず

して、窮まるに臨んで方に悔ゆ。之を後に悔ゆるも將た何ぞ及ばんや」との聖訓には嚴として犯すべからざるものがある。聖人は、かゝる凡愚の代表者として、無始以來の生死罪惡を大悲せられる佛の本願に信順して、無常に身を委ねつゝ、よく無常を超えて行かれたのであつた。

二

京都を出で、叡山に登り、叡山を下つて再び京都に隱れ、更に北陸に流され、關東に移つて、終に故郷に歸住せられるまで、轉々と各地に流浪して具さに辛酸を嘗め、晩年に及ぶまで諸種の聖教を拜讀し、幾多の撰述を事として、よく九十歳の長命を保たれた程の聖人であるから、平素は定めし健康であられたに違ひない。現存の文獻では聖人が病氣をされたといふやうな記述は極めて少いやうであり。寡聞の私では僅に二三の事例に考へ及ぶに過ぎない。その中で先づ最も著名なものは寛喜三年四月の病臥である。

寛喜三年（聖人五十九歳）四月四日の夕から十一日の曉

まで八日間に亙り、聖人が風邪のために臥床された時の顛末は『惠信尼文書』に詳記されており、覺如上人の『口傳鈔』にはこれに根據されたい一章があるが、その内容は前者とはよほど變つてゐる。この時聖人は大分重態であつて、腰膝を打たせられることもなく、看病人も近よせられないで、靜かに臥してゐられたけれども、非常に熱が高くて、頭痛も一通りではなかつたといふ。『口傳鈔』では聖人自身の言葉として、この臥床は常の病ではなく、一面には三部經を千部讀誦しようかと思つたり、他面には自信教人信の義に従つて、自らも信じ、人にも教へて信ぜしめるほかに別の勤めはない筈だと考へたりして、心に惑ひが生じたから、このことをよく思索して決定するために、ひきかづいて臥したといふことになつてゐる。『惠信尼文書』を研究し紹介された先輩の方々にもこの『口傳鈔』の記述が先入主となつたものか、聖人が病中特に教化問題に就いて苦慮されたやうに見做してゐられる向きもあるが、この文書をよく讀むと、教化のことなどはこの病中に今更問題になつてゐるのではな

く、それは聖人が自ら十七八年以前といはれ、惠信尼の回顧では信蓮房が四歳の時といふ建保二年(聖人四十二歳)に既に解決されてゐるのである。即ち聖人は越後から常陸への途中、佐貫の地に於いて衆生利益のために三部經の讀誦を發願されたが、四五日して自信教人信こそまことの報佛恩の道であると聞いてゐるのに、今更名號の外に何の不足あつて經を讀まうかと思ひ返して中止されたのである。従つて寛喜三年の風氣は恐らく自然の發病であつて、格別問題解決のために臥床されたのではなく、又病中改めて故らに過去の問題を再び取出して考慮されたのでもなからう。唯重症で高熱に苦しんでゐられる裡に、就床二日目から夢現の裡に無意識で大經を讀み續けてゐるやうに想はれたのである。「適々目をふさげば、經の文字の一字も残りずきらかに備さに見ゆるなり」といつてゐられるあたり、如何にも病中異常の幻覺のやうに考へられる。病中無意識の讀經である處に、愈々十七八年も前に三經讀誦を發願せられた時の餘執ともいふべきものが感知されるのであり、「人の執心自力の心は

よく／＼思慮あるべし」との切なる反省も生ずる譯である。聖人の純も亦己まざる態度が適、病中の一發作によつて、愈々嚴肅な自己批判を促さずにおかなかつたのであらう。そして「まはさてあらん」と聲に發するまで自ら深く頷かれたのは、やがて發汗して病氣快愈される時であつたのである。

尙何時のことであつたか分らないが、『蓮如上人一期記』や『空善記』などによると、聖人は或時船に乗つて酔はれたことがあり、その時「かち(陸)路のある所へは舟には乗るまじきことなり」といはれた。又舟に少し酔はれたことがあつて、「くさびら(茸)は食ふまじきものなり」といはれた。それから高田の顯智は一生舟にも乗らず、茸も食はなかつたといふ。この話は一方には全く逆になつて、顯智が上洛の際船路で難風に遭つて迷惑したことがあり、又茸に酔つて、聖人への面謁が遅れたことがあつて、聖人から舟に乗ること、茸を食ふことを戒められたので、顯智は一期船に乗らず、茸を受用しなかつたと傳へられてゐる。『一期記』には兩者を別條にして併

せ載せてあるが、『御一代記聞書』等には後者を記してある。これは蓮如上人時代に傳へられてゐた説話で、本來同一のものであつたに違ひないが、何れか一方の話が語り傳へられてゐる間に、誤つて他の一方の話に轉化したものであらう。兩者を比較すると、前者の方が調子として自然であり、顯智が師の言に信順する心持としても一入味ひ深いものがあるから、後者は訛傳と見て差支あるまい。この話は聖人がほんの一次的に、眩暈されたり中毒されたりしたのであつて、病氣といふ程のことではないが、舟に乗るといふやうなことから考へて、北陸か關東の經廻中、旅空で起つた出來事と想察される。故らに記録さるべき大事ではあるまいけれども、顯智が師の聖人の暫時の仰せをもひたむきに信奉したといふ點を重視して傳へられたものであらう。

三

歎異鈔第九章の物語は聖人の歸洛以後、唯圓房が歩みを遼遠の洛陽に運んだ折にでも語られたものであらうか。大體聖人老後の深い信境を告げられたものと考へて

よからう。この物語の中に聖人が「淨土へいそぎまいり
たきこゝろのなくて、いさゝか所勞のこともあれば、死
なんずるやらんとこゝろほそくおほゆることも、煩惱の
所爲なり」といはれたのは、餘りにも著名な言葉である。

凡そ人は病氣をしても、よほど重篤でもない限り、死を
豫想することは稀であり、大分年が更けても、感情が硬
ばると、やはり「今生はいつまでも生きのびんずるやう」
に思ふのである。健康であつたらしく想像される聖人、
老境に入られた聖人にして、聊かの所勞にもこれが死因
でないかと心細く思はれるといふのは、如何にもその感
情が鋭敏であり、病氣といふものを本當に驚きの眼を
以つて觀てゐられたことが窺はれる。

深い人間苦に沈めば、時に「あはれ死なばや」の歎も發
せずにおられず、念佛しつゝ辛くも世を渡るものは、弱
かに彼土への往生を期して、心和ませられる。それにも
拘はらず、苟且の病氣にも死ぬのでないかと心細く、淨
土參りを急がぬといふことは心得難い矛盾のやうである
が、そこに人間の本能といふか、所謂煩惱の所爲がある

譯であり、凡夫人の悲喜が交感される譯でもある。法然
聖人は「暁天を待つ商客は鷄鳴に驚いて猶喜び、淨土を
欣ぶ行人は病惱を得て偏に楽しむ」といはれたと傳へら
れ、「柴の戸にあけくれかゝるしら雲をいつむらさきの
いろに見なさん」と詠ぜられたといふ。如何にも殊勝な
願生者らしい情感の持主であつて、淨土往生を急いでゐ
られたらしい。いくら愚癡の法然房と謙退されても、十
惡の法然房と卑下されても、何となくさういはれること
自體が高徳の然らしめる所のやうにも思はれ、どこまで
も典型的な聖者であつたやうである。そこへ行くと親鸞
聖人は衷心から煩惱の興盛を悲しんだ人であり、あくま
で凡夫人の自覺に立つてゐられたやうである。そして聖
人はそれだけに一層法然聖人を慕はすにゐられなかつた
のではあるまいか。

聖人常隨の弟子蓮位房から高田の慶信房に送つた書狀
には、「おりふし、御かいひやうにて、御わづらひにわ
たらせたまひ候へども」といふ言葉があつて、この時聖
人は確かに何か病氣をしてゐられたらしい。今の私には

まだ「御かいひやう」の語が不明なのは残念である。私は中外出版の『新撰眞宗聖典』によつて、この消息を讀んでゐるのであるが、この本に誤植でもないか、或は底本に誤寫でもあつたのではないかと疑つても見る。高田に傳へられる善性師の輯めた御消息集、若くはその確實な寫本でも見れば、確め得る譯だが。差し當りこゝではそんなことは許されない。或る國學者に質したら、色々調べた上で、「御かいひやう」は「御大病」ではあるまいかと考へてくれた。如何にもよい思ひ附きであるが、聖人はこの時豫て慶信から上つた書狀の一部に、自筆を以つて訂正を加へたり、先方の質問に就いては短いながらも自分の意見を書き添へてやつてゐられる程であるから、さほど大患といふでもなかつたらうと思ふ。この病氣をされた年時は不明であるが、蓮位がその消息の中に詳しく覺信房の最後を報知してをり、その覺信房は建長八年聖人八十四歳の時にはまだ存命であり、正元元年聖人八十七歳の時には既に往生してゐるから、この間二三年の中のことだ、大分老年に及ばれてからの病氣であつた

に違ひない。さうした老病の裡からも、東國の弟子慶信の上狀に對して、蓮位に懇切な返事を認めさせ、自らも一部は筆を執つて親切に教化された聖人の至情には欽仰せずにはゐられぬものがある。殊に蓮位が御前でその消息に不備な點でもないかと念のために讀み上げるのを聽き取られ、覺信房のことを報じた一段に至ると、哀れを覺えて涙を流されたといふやうなことが書き添へてあるのを見ると、愈々聖人の濃やかな情愛が偲ばれて一入ありがたい。

四

正嘉二年、聖人八十六歳の秋までは、盛に色々の著述があつたが、同年十二月には顯智が上洛して、自然法爾の法語を聞書してゐるといふことから、史家の中には聖人が八十六歳の暮から大分老衰されて、筆を執るのも大儀になつてゐられたやうに説く人もある。併し正元元年八十七歳の十月、高田の入道に宛てられた眞蹟の消息が傳はつてゐるばかりでなく、文應元年八十八歳十一月乗信房宛の消息もあり、同年十二月『彌陀如來名號德』の

撰述若くは筆寫もある程であるから、尙年次不明の幾多の消息類は別としても、少くとも八十八歳の暮までは筆硯を捨てられなかつたやうであつて、その心氣の明爽は想ひ知るべきである。

けれども聖人は正嘉元年八十五歳の閏三月の宛名不詳の消息に先方の穿鑿した質問にでも答へられる爲か、種の法數を擧げ、かなり煩はしい法門の沙汰をしながらも、最後に「目もみえず候。なにごとみみなわすれて候うへに、人などにあきらかにまふすべき身にもあらず候。よくく淨土の學生にとひ申給べし」と告げてゐられる。既に名利を離れ、才覺を脱して、聰明と睿智とを生ずる老の境に入られ、萬事を忘却した無知無爲の天地に逍遙してゐられた。そしてこゝに恩師法然聖人を追懷するの念が益々深められて行つたのではあるまいか。

聖人は建仁元年二十九歳で吉水門下に入り、元久二年三十三歳で選擇集の附屬を受けられたが、元來法然聖人は四十年の年長者であつて、兩聖人の年齢の差は餘りに多い。従つて親鸞聖人が如何に法然聖人を敬慕され、法

然聖人が如何に親鸞聖人を殊過されても、この年齢の開きは色々の點で二人を容易に接近させないものもあつたのではなからうか。當時吉水門下にあつて親鸞聖人が表面的に特に頭角を現はしてゐられないといふことも、この邊に幾分の事由があつたかも知れない。殊に思想信仰の問題になると、固より兩聖人の間の地位や性格上の相異も忘れてはならぬだらうけれども、或場合にはこの年齢の差異をもつと重大に見ねばなるまい。さういふ點から考へると、親鸞聖人は入室の當初既に他力信仰に入られ、その主著『教行信證』には『選擇集』題下の十四字や總結の八十一字、さては三心章の信疑得失の文など、教義的に重要なものを引用され、更に後序には縷々として師恩の厚きを叙べてはゐられるが、それよりも尙年時を経て聖人が、躬ら曾て日夜親炙された當時の法然聖人の年齢に達し、更により以上の高齢に及ばれると、昔法然聖人が身を以つて示された種々の教化には一層深く領けるものがあつたに違ひない。老後の親鸞聖人の物語や消息の上に、屢々懐しく追想される法然聖人の言行が生々

として再現されたのは、蓋し故あることであらう。かくて自然法爾を高調し、義なきを義とし、無我無心に本願の不思議を仰いで、如何にも法然聖人の大らかな念佛をさながらに相承された面目が、老年の親鸞聖人に鮮かに現はれたやうに思はれる。

かくて頽齡の聖人は漸々に迫り来る死を靜かに凝視してゐられたやうである。「この身はいまはとしきはまりてさふらへば、さだめてさきだちて往生し候はんずれば、淨土にてかならずくまちなまいらせさふらふべし」(有阿彌陀佛宛消息)と深い、情懷をも極めて自然に平かに叙べてゐられる。そして「なにごとく、いのちの候らんほどは申べく候」(高田の入道宛消息)とか「いのちさふらは、またくまうしさふらふべくさふらふ」(性信房宛消息)とかいうて、將來の面調や文通を期するには、常に控へ目な假設の言葉を置いてゐられる。「なほおほつかなきことあらば、今日までいきてさふらへば、わざともこれへたづねたまふべし、また便にもおほせたまふべし」(宛名末詳消息)といはれるあたりには、何か今日

までの確かな存命を忝く顧みると共に、明日の命的にすべからざるを暗黙の裡に語つてゐられるやうである。こゝに於いて聖人には死の前程としての老は再び無常感を喚び起すことゝなつた。併しその無常感は青少年時代の胸に宿るやるせなき不安や焦燥とは自ら異なつて深く透徹した、落着きを持つてゐた。上に一言した八十八歳の乗信房宛の消息の初に、「なによりも、ござ、ことし老少男女おほくの人々、死にあひて候らんことこそ、あはれに候へ。たゞし生死無常のことはり、くはしく如來のときをかせおはしまして候へば、おどろきおほしめすべからず候なり」と書かれた如きは、東國在住の數多の同胞の死を弔はれる言葉としては、餘りに淡々として、同情に乏しいやうであるが、聖人の意に立ち入つて味へば、苟も佛徒ならば生死無常の理には夙に驚くべきであつて、今更驚くには當らないのであり、寧ろ今日の一日を生かされてあることにこそ驚畏を覺え、感謝を捧げて然るべきだといふことにもなる。即ち死は當然であり、生は不思議と感受されるのであつて、無常感に

よつて却つて心靜かならしめられるのである。

『親鸞傳繪』の語る所に従へば、聖人は弘長二年仲冬下旬から聊か不例であつたといふ。それは誰でも察するやうに、恐らく老衰が特に加はつたのであらう。そして二十八日には九十歳の高壽を以つて終に往生の素懷を遂げられたのである。夢想を語り、神異を述べ、その行文は終始絢爛流麗を極めた『傳繪』も、この一段に至つては忽ち記載が質實となり、森嚴となつて、何等奇瑞を以つて修飾してゐない。専ら、相續された佛恩報謝の稱名念佛の聲が終に絶えたといふ、恐らく事實ながらの記述は祖徳讃仰の上からも、教義寄顯の上からも、却つて人をして深く傾聽せしめるものがある。

五

病といひ、死といふも、これが一種の譬喩として、精神的の意味に用ひられる場合には、單なる譬喩以上に更に現實的な意味を持ち、恐るべく惡むべき存在ともなる。聖人が「一切煩惱の病」といひ、「難治の三病」といはれるもの、「二乘雜善の中下の屍骸」といひ、「逆謗の屍

骸」といはれるもの、何れも救藥し難いものとして取扱はれてゐる。

凡そ佛教では佛を譬に、法を藥に、煩惱惡業を病に喩へるのが常であつて、『教行信證信卷』に引かれた『安樂集』の説聽の方軌、同じく『化卷』に引かれた『涅槃經』の善知識の説等は何れもこの譬喩を巧妙に用ひたものであるが、『教行信證』には尙聖人の自釋としても、『行卷』に「善見藥王之如し、能く一切煩惱の病を破するが故に」といはれるのを始めとし、隨處にこの譬喩が出て來る。今その著しいもの二三を拾つて見よう。

『行卷』に當時支那から新しく渡來した書で、聖人がかなり愛讀されたらしい宗曉の『樂邦文類』を引用して、「罌丹の一粒は鐵を變じて金と成す、眞理の一言は惡業を轉じて善業と成す」との言葉がある。併し現存の『樂邦文類』の原文ではこの句は「還丹の一粒は鐵に點じて金と成す。眞理の一言は凡を革めて聖と成す。彌陀の教觀は眞に點鐵成金の妙藥なり」となつてゐるから、聖人所覽の本が異本であつたとは考へ難く、恐らく善意の上から

改作されたのであらう、還丹は『抱朴子』の金丹篇等に出て来る所謂九轉の還丹で、古來仙家に貴ばれる傳説の靈藥である。こゝに點の字が變に、草の字が轉に作られたのは、語勢としては慈愍の傷に「能く瓦礫をして變じて金と成らしむ」とあるあたりに暗示を得られたのかも知れないが、そこには特に聖人の深意が存するのであつて、故らに逆謗が功德に轉變せられる義を成せんとされるのである。尙この句は『總序』に「圓融至徳の嘉號は惡を轉じて徳と成すの正智」といひ、『信卷』に「轉惡成善の益」を出される典據としても注意すべきであらう。

『信卷』本には三心を結釋して一心とし、その絶對の徳を歎するに至つて、「喩へば阿伽陀藥の能く一切の毒を滅するが如し。如來誓願の藥は能く智愚の毒を滅す」と『華嚴經』に依つて阿伽陀藥の喩を掲げ、又同末卷には難治の機を明して『涅槃經』を引き、これが歸結に於いて、「喩へば醍醐の妙藥の一切の病を療するが如し(中略) 本願醍醐の妙藥を執持すべきなり」と『涅槃經』に據つて醍醐味の喩を出されてある。こゝに私共は圖らずも『信卷』

祖聖と老病死

の本末兩卷に一代佛教の始終たる華嚴と涅槃とを相對せしめ、阿伽陀藥と醍醐の妙藥とが各、本願に喩へられたのを見ることである。而も兩藥は各、本願に喩へられながらも、前者は絶對の否定を顯はし、後者は絶對の肯定を示す所にその妙味がある。即ち阿伽陀藥は無病藥と譯せられる劇烈な藥劑であつて、『華嚴經』では智慧を以つて無知を除く喩となつてゐるが、今こゝでは四不十四非を絶したる不可思議の誓願の信樂に喩へられ、能く智愚の毒を滅すと轉用された、謂ふに愚には愚として慚愧すべき毒のあるのは勿論であるが、智にも智として反省せねばならぬ毒がある筈である。『愚禿鈔』に至誠心に就いて五對を擧げられる中に、毒藥對があり、「毒とは善惡雜心なり」と解せられたのも同意であらう。如來の本願はその智善の毒も愚惡の毒も共に除滅されるのであつて、『華嚴經』に説く所よりも、更に廣く強い否定となる譯である。それは一應經文に「一切の毒を滅す」とある點に留意して、特にかゝる解釋を加へられたとも見られるけれど、寧ろ聖人の深い體驗にその根據があると考へて

よからう。醍醐の妙藥は五味の最上であつて、阿伽陀藥が諸毒を消滅する劇藥であるとすれば、これは全身を根本的に養つて、一切の病を療治する滋養劑である。佛最後の説法として「一切衆生悉有佛性」といひ、衆生が常住の佛性を開顯することを説かれた『涅槃經』にこの醍醐の喩を出されたのであるが、こゝでは難化の三機、難治の三病が大悲の弘誓を憑み、利他の信海に歸すれば、これを矜哀して治し、これを憐愍して療せられるのに喩へられた。一應は救ひから除外するとまでいはれたやうな逆諍や闡提も、最後には別にその惡逆を除滅するのではなく、月愛三昧の光を身に蒙つた阿闍世の如く、大悲の矜哀憐憫によつて、自然に療治されるのが醍醐の妙藥といはれる本願の不思議であつて、生きとし生けるものほか、かつてその罪や惱みから、さながらにして救はれることゝなつたのである。

因みに涅槃經に登場する阿闍世王の病とその療治とに就いて一考しておきたい。王は逆罪を犯した精神的の病者であると共に、身に瘡を患ふ肉體的の病人でもあつ

た。然るに經に「父を害するに因りて、己が心に悔熱を生ず、心悔熱するが故に、徧體に瘡を生ず」と説かれ、王自身母に向つて、「是の如きの瘡は心より生じて、四大より起れるにあらず。若し衆生能く治することありといはゞ、この處あることなけん」と懊惱してゐる、これらの教説を通して私共は先づ身心の相關とか、靈肉の不二とかいふやうなことを暗示されると同時に、所謂業病といふものを考へさせられる。謂ふに人間としては身だけの病といふものもなく、心だけの惱みといふものもあり得ないのであつて、兩者の關係は餘りにも密接であるが、こゝには姑く因果の關係から説かれてゐる。而も心から生じた病とは單なる心理作用とか神経作用とかいふやうなものから起つたと考へられる疾病、即ち「氣の持ちやうで癒る」といふやうな病氣とは異つて、恐るべき宿業の現はれとしての病患であり、逆も治る道理がないといふ絶望と苦悶とを感ぜしめるものである。この心持はやがて阿闍世の慚愧となり、更にその救ひをも約束されるものであるが、六師の教を奉ずる大臣たちは王のこの心持

を徒らに睡らせようと計つた。「身痛とせんや、心痛とせんや」といつて慰めても、それは既に身心の痛傷を分つものであるから、王は毎に「我今身心豈痛まざるを得んや」と反撥してゐる。それでも六師の説は先づ王の心痛ばかりを追究し各、獨特の思想を以つて王の心に懐く問題から解決せしめようとして、遂に得なかつたのである。これに反して耆婆は王の慚愧を全面的に肯定し、隨喜して、佛の所に誘つたが、佛は先づ月愛三昧の光を以つて王の身を治して、然る後心に及ばれたといふ。それは實に深い慈悲を以つて王の身に生じた堪へ難い病患から救濟して、その心の苦悶を後廻しにされ、而も王を全體的に救はれるのであつて、如何にも佛の大悲方便の尊さを仰がずにゐられない。

聖人が慈信房に宛てられた消息に、「念佛するひとの死にやうも、身より病をするひとは、往生のやうをまふすべからず。こゝろより病をするひとは、天魔ともなり、地獄にもおつることにさふらふべし。こゝろよりおこる病と、身よりおこる病とは、かはるべければ、こゝ

ろよりおこりて死ぬるひとのことを、よく／＼御はからひさふらふべし」と誡められたのは、何となく『教行信證』所引の『涅槃經』との關係を思はしめるものがある。この言葉は特に造惡無礙を主張したらしい信願房の所説に當り、又慈悲の考慮を促されたのであつて、極めて穩かに道德的に述べられてあるが、恐らく聖人の本意からすれば、心から病をするやうな人こそ先づ以つて救はねばならぬのであらう。併しそんなことを人に對する、別して我が子に對する書信の上などに輕々しく揚言したくない聖人の愼み深いお心持をも察せねばなるまい。

六

「眞實信心の行人は、攝取不捨のゆへに正定聚のくらゐに住す。このゆへに臨終をまつことなし、來迎をたのむことなし」とは、聖人の力強い宣言であつた。聖人の歸洛後に關東の同行の中に臨終を期するといふ沙汰のあつた時など、信心まことなる人は誓願の利益で、攝取して捨てられぬから、來迎臨終を期すべきでない、いまだ信心の定まらぬ人は臨終をも期し、來迎をも待つがよか

らうとて懇切に教誡してゐられる。(隨信房宛消息)。これが後來所謂平生業成、不來迎の教義とし力説されることとなつたのであるが、併し聖人は後世の末徒が考へる如く、臨終はどうあつてもよいといふやうに、臨終に對して全く無關心であられたやうにも思はれない。乘信房への消息に「まづ善信が身には臨終の善惡をばまふさず。

信心決定の人はうたがひのなければ、正定聚に住すること候なり。さればこそ愚癡無知の人もをはりもめでたく候へ」といはれた如き、具さに玩味すべきであらう。

即ち聖人にあつては、臨終の正念とか妄念とかいふことを問題として、特に愛着を感じる眷屬を遠ざけ、臨終の行儀を修するやうなことはないけれども、疑惑なく遅慮なき信仰の徳として、愚癡無智のものもめでたき臨終を迎へ得る幸恵があるものと考へられたやうである。聖人が明法房や平塚の入道の往生を聞いて、何等悲しむことなく、却つて深く隨喜し、殊に明法房の往生に就いては消息の上に幾度も幾度もうれしきこと、めでたきこと、してこれを喜び、常陸國中の往生に志すものゝ爲にも、

鹿島、行方、奥郡の地の往生願ふ人々の爲にも、喜びであるまで極言されたのは、明法房が何か傳説にあるやうなその前身の非行に引き換へて、特に美しい往生を遂げたことを思はしめる。謂ふにかゝるめでたく、喜ばしき往生とは、紫雲が現はれたり、異香が薫つたり、天樂が聞えたりするやうな奇瑞を伴ふのではなく、最後まで信心たぢろがずして、専ら念佛して、靜かに終ることであらう。蓮位の消息に高田の覺信房の信仰をまことにめでたく、うらやましいと絶讚し、その終焉を傳へて「おはりのとき、南無阿彌陀佛、南無無礙光如來、南無不可思議光如來と、となゑられて、てをくみて、しづかにおわられて候しなり」というてゐる如きは、恐らく當時めでたき往生と見られた適例であらう。上述の『傳繪』に記された聖人の往生の模様などは、作者に於いて念佛者の龜鑑として仰がしむべき用意あることは勿論である。

臨終といふものは人間の一生に取つて何といつても一大事である。信仰さへあれば、どうでもよいといふやうなものでもあるまい。別に臨終來迎を期するといふこ

とではなしに、出来ることならば安らかに最後の息を引取らせて頂きたいといふことは、人間として極めて自然な願ひであり、淨土へ参るにも、どこまでも佛に連れて往つて頂くといふのが偽りのない率直な感情であつて、又そこに却つて他力信仰の謙虚さもあるのではなからうか。そして結局は如何なる苦悶の裡にも、念佛一つで死に切らして頂けるといふ所に、何よりのめでたさがあるやうである。

私は最後に聖人がその同朋と共に同一念佛によつて、俱會一處の往生を期せられる念が如何に切であつたかを回想してこの稿を結ぶこととする。承久三年、聖覺法師の撰述された『唯信抄』は聖人關東在任中にこれを讀んで、大いに影響を受け、歸洛後にも關東の同朋に盛にこれを推奨してゐられるのであるが、その『唯信抄』の結文には、「これをみむ人、さだめてあざけりをなさむか。しかれども信謗ともに因としてみなまさに淨土にむまるべし。今生ゆめのうちのちぎりをしるべとして、來世のさとのまへの縁をむすばむとなり。われおくれれば人に

みちびかれ、われさきだゝば人をみちびかむ。生々に善友となりて、たがひに佛道を修せしめ、世々に知識として、ともに迷執をたゝむ」といふ。これは『教行信證』の後序に「信順を因と爲し、疑傍を縁と爲し、作樂を願力に彰はし、妙果を安養に顯はさん」とて、更に安樂集の「前に生れん者は後を導き、後に生れん者は前を訪ひ、連續無窮にして、願はくは休止せざらしめんと欲す。無邊の生死海を盡さんが爲の故なり」といふ文を引かれるのと相應じ、何れも聖人の最も感銘深い言葉であつたと思はれる。かゝる言葉に現はれる感情は、聖人が晩年に及ばれるに従ひ、愈々切實となり、先立つて淨土へ参つた覺念房や覺信房が、必ず待つてゐてくれるだらうといはれたり、有阿彌陀佛や高田の入道に對して、自分が先立つて、往生したら必ず待つてゐると告げられたりして、待たれる身であり、待つ身となるべきことを繰返し／＼語つてゐられる。聖人に取つてはやがて平等一如の世界へ生れ合はせるといふこと程、人と親しみ合へる心持はないのであり、當來の親友として人に呼びかける位

懐しいことはないのである。聖人に教化といふことがあるとすれば、その根據は全くこゝにあつたのではあるまいか。

かくて老といひ、病といひ、死といふもの、何れも人生にあつて最も忌むべく厭ふべき大苦惱であるが、聖人に於いては皆夫々に意味があり、慰めがあり、救ひがあつたことを思はしめられる。

(附記) この稿を編輯所へ送り届けて後、多屋頼俊兄が一讀して、直ちに「御かいひやう」に就き、懇切な教示を與へてくれた。同兄に據れば、「御かいひやう」は「御咳病」で、風邪の類であり、『古今著聞集』にも「咳病をしてわづらひける云々」とあるとのことである。慶信の上状は十月十日の日附となつてをり、蓮位の書状は十月二十九日の日附となつてゐて、京都は餘程寒氣の加はる頃であり、病氣はさほど重態ではなかつたと察せられるから、聖人がこの時風邪を引いてゐられたといふことは、事情の上からも如何にも尤もと頷かれる。私の地方では今日でも風邪のことを「がいき」といふが、それにも一致することを氣附かされた。祖聖の言葉やその行實に就いての記録は、たとひ零なものであつても、末學としてまことに關心が深く、懐し

みが多くて、忽にしたくない。従つて博雅の君子には或は問題にならないこの一語でも、私に取つてはこゝに始めてその意義が明かにされたことを大いに喜ぶと共に、多屋兄に厚く感謝する次第である。(二月二十五日)

編輯室から

◆大谷學報は毎號百頁前後のものを年に六冊刊行する豫定で用紙の配給について豫め諒解を得て着手したのであるが、最近に到つて、毎號八十頁以上の配給を受ける事が困難になつて來た。それで今號は此の後に論文をもう一篇掲げる豫定であつたが、其は次號へ廻はさなければならぬ事になつた。執筆者並びに讀者諸氏の御諒察を願ひたい。

◆前號から全文二段組にしたので、活字の收容量は約二割増加してゐる。次號からは更に紙数を減少しなければならなくなつたが、紙数の減少に従つて内容の減少は止むを得ないとするか、活字を小さくして内容の減少を防ぐか、我々は二者何れかを選ばなければならぬ。相成るべくは後者を選んで、閲讀には少々不便でも、内容の減少を防ぎたいと思つてゐる。

◆昨年末に刊行する豫定であつた大谷大學研究年報は色々の都合で印刷が遅れてゐたが、四月には刊行し得ると思ふ内容は次頁に掲げる如く勞作揃ひである。御期待を請ふ。因に第一輯のみは、甲種會員からも會費は頂いて居りませんから、奮つて御購讀下さるやうに希望致します。